

河陽新聞

熊本市南部地区市民の会
発行責任者 村田幸博

今年の川尻月間も盛況のうちに終了しました。

かわじりの酒蔵まつり7,600人もが参加



自転車のケーキ屋さんも、にぎわいを演出していた



多くの人がJR川尻駅経由で参加

今年で15回目となった川尻月間も、盛況のうちに終了しました。川尻月間は例年、2月の「和菓子ふれあい工房」から、3月のズイヨ

ウ酒造を中心にした「かわじりの酒蔵まつり」までの一ヶ月間を通じ、川尻地区に町外からの人を呼び込む目的ではじめられました。

その昔、川尻の祭は、春を告げる3月の大慈禪寺まつり、夏8月のお盆に行われる川尻精霊流し、秋の稲の収穫が終わった10月に行われる河尻神宮の秋の大祭、上記の三つが川尻を代表する祭りと呼ばれ、「春の大禪寺」「夏は精霊流し」「秋の河尻神社」でした。近年は、それらの祭に



加え、冬の季節に開催される「酒蔵まつり」や「熊本城マラソン」は、川尻の文化や町並みを活すイベントとして人気を集めています。祭りやイベントを通じて時代の変化を感じている事の一つに、人々の移動手段があります。特に、今年の酒蔵まつりはタクシーや自家用車の送迎が少なくなり大勢の人がJRの列車やバス、または、歩いて来られる方が目立ちました。酒蔵まつりが始まる時刻には行列の最後尾は肥後銀行川尻支店まで連なり、参加された方が、その人の多さに感動されていました。熊本城マラソン時の一万人以上の人が走りぬける様子とは異なり、数千人の人が整然と並んで待つ風景は川尻の風物詩になりつつあります。話題は異なりますが2月・3月の川尻



行列の最後尾は肥後銀行先まで続いていました

月間の期間中には、川尻小学校4年生を対象にバードウォッチングが十数年間続けられています。授業の名称はバードウォッチングですが、地域の春を見つけ地域の歴史や誇りを学ぶ野外学習でもあります。

毎年、終了後にはお礼の手紙や感想文が送られて来ますが、えんぴつで描かれた内容から感動している様子が伝わります。コースは、川尻小学校の玄関を出発し、柳掘りをぬけ無田川を眺め、小路橋を渡り、ズイヨウ酒造の工場内を通りぬけ、正中島から加勢川に出て、新町橋下の河原で数種類のカモやサギを身近に肉眼で眺め、グラウンドゴルフ場で堤防にあり、横町の延寿寺で西南の役の話を和尚さんから聞き、法宣寺では川尻小学校創設の碑・加藤清正の正室がまつられている供養塔を眺め、川尻電車の軌道跡や終着駅を横切り、薩摩街道の話を聞きながら新田町の歩道橋を超えて小学校に戻るコースで、毎年、20・26種の野鳥を確認する内容です。これも川尻月間です。

川尻公会堂の耐震改修問題で、熊本市より説明会が行われました



設立碑と川尻公会堂

【熊本県文化企画課資料】HPより

川尻公会堂は昭和5年（1930年）9月、現在のズイヨウ酒造の先代吉村彦太郎とその親族により地域社会発展のために寄贈されたものです。公会堂の右前には昭和6年12月、吉村彦太郎の遺徳をしのび「懷徳碑」が建立されています。公民館の利用が、社会教育法によって規定されたのは、昭和24年（1949年）のことであり、それよりも15年以上も早く一般の人びとの教育・学習の場を提供した川尻公会堂は、公民館のさががけとなった施設ともいえるでしょう。（後省略 高見 覚 著『郷土川尻 水郷と歴史の町』より）

昨年10月より、川尻公会堂が耐震性の問題で使用できなくなり多くの方より問合せがありました。



補強工事が施された後の大広間のイメージ



公会堂の廊下が木材で補強された後のイメージ

を組み合わせ、現況の風景やイメージを損なわないように検討し、左写真（2枚）の様な完成後のイメージ写真を提示し説明がなされました。構造的には木組みや畳の文化を残し川尻らしい川尻公会堂を残し伝えたいと考えています。現況の川尻公会堂は耐震的に使用不能な状況にあり、昨年10月から使用停止状態にあります。毎週金曜日には玄関や窓を開き風通しを行っていただきます。今後は、27年度予算で設計を済ませ、28年度末までに改修工事を行う計画です。今後とも校区の皆さんとも会話を重ね、よりよい公会堂を残し伝えて行きたいと考えています。左の写真×2枚は完成後のイメージ写真で、左が公会堂の大広間で開放されていた障子の一部が木造で補強されます。左横の写真は、老人センター側の廊下のイメージ写真で、耐震横揺れ防止の木組みが施されますが奥が見えています。

編集後記

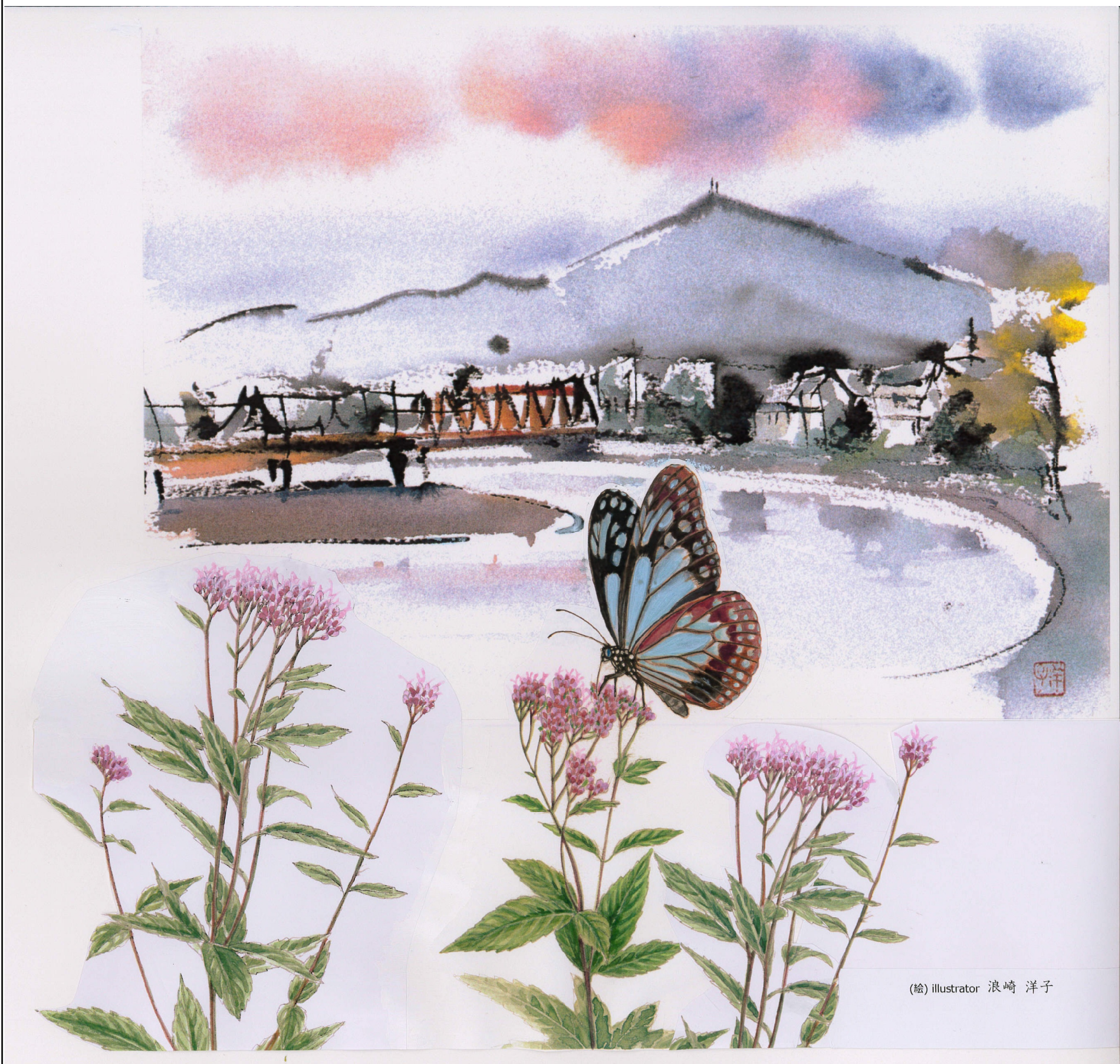
南部地区市民の会では「一万人で描く一枚の絵」シリーズとして、毎年、テーマを設け色々な取り組みを行ってきました。過去には「女性が安心して暮らせる町づくり」や「安全・安心な町づくり」などがありました。25年度からはじめた「旅する蝶を招く計画」は去年十月には127頭、一昨年は108頭と捕獲＆マージングを行い、新聞などの報道でとり上げられたために川尻小学校を中心に一躍有名な地域になりました。そこで、先般、環境問題や町づくりを支援される再春館製菓・一本の木財団へ支援申請を出しましたところ、当会への支援が決定しました。「子供に夢を、老人に生きがい。そして、青年にやりがいのある町づくりを夢んでいます。」裏面に掲載している絵は川尻在住のイラストレーター浪崎洋子さんに依頼し描いてもらいました。加勢川や金峰山をバックに旅する蝶アサギマダラとフジバカマが描いてあります。先般、NHKテレビ「ダーウィンが来た」で紹介された「旅する蝶」を見られた方も多いと思います。NHKに交渉し10月2日、川尻小学校体育館で映像や話を伝えてもらう催しなど、今回の助成で実施する計画です。また、青年たちが「旅する蝶」をテーマに新製品を開発中です。ご支援宜しくお願いします。

南部市民の会、27年度事業「旅する蝶を招く計画」は、再春館「一本の木」財団の助成事業で4月から実施します。

旅する蝶のイメージ絵です



守る、つなげる、共に生きる。
公益財団法人 再春館「一本の木」財団



(絵) illustrator 浪崎 洋子

川尻校区のみなさんも！
「旅する蝶」を呼んでみませんか？

熊本市南部地区市民の会は、昭和61年4月に設立され熊本市川尻小学校校区の全世帯の支援で運営されています。

設立された30年前は、川尻校区の中心を流れる無田川はドブ川化し加勢川も透明度5cmもない汚い水が流れる川でした。

そこで校区では、先ずは「住みよい町」を掲げ川尻校区あげて無田川の大清掃を行い、町づくりがはじめられました。

無田川の大清掃活動は、その後、「緑川の日」とつながり、緑川流域に呼びかけて行う大清掃は日本のモデルとなりました。

また、川尻校区では平成18年10月九州で初めての「第7回・川での福祉と教育の全国大会」を実施し、川を活かした教育や福祉・スポーツの先頭役を担って来ました。

目指す最終目的は自然豊かで生活環境の整った「暮らしてみたい町」です。

今回の「旅する蝶を招く計画」も、花の香り漂い蝶や人が楽しめる自然環境の豊かな川尻校区づくりの一環と位置付けています。

今年で3年目となるフジバカマの苗づくりは、川尻小学校の緑の少年団と力を合わせ4月から小学校で実施します。

ご興味のある方は苗づくりにご参加ください。また、フジバカマの苗の欲しい方は、町内の自治会長さんへ申し出下さい。

旅する蝶アサギマダラは下記のデザインの姿です。川尻校区へは10月中旬に飛来します。図ガラは新撰組のハッピーと、ご記憶ください。



また、フジバカマは、秋の七草のひとつで、万葉集にうたわれる日本を代表する草花です。その昔、女性が布袋にいれ香り花として愛用されていたとの事です。

フジバカマの植物本体やフジバカマの香りかぎたい方は、川尻小学校玄関を眺めて下さい。香りの源は、川尻小学校玄関を左に5m、モミジの木に昨年のフジバカマを吊るしてあります。

川尻小学校玄関周辺はほぼ一年間フジバカマの香りが漂っています。本年度実施する「旅する蝶を招く計画」事業は再春館「一本の木」財団の助成金で実施します。

この秋には、川尻校区や南区をフジバカマの花が咲き乱れ、旅する蝶アサギマダラが乱舞する町を夢みています。